續千載和歌集 下

[illegible][illegible]文庫

續千載和歌集巻第十四

戀哥四

題しらす　　坂上是則

あさやまふかきさへ河音にこそ人をたのまめ
おもひける人をよそにふみありときこえてはつれなしきる

九条右大臣

秋萩のしたはにしられぬ萩のねをいまさらふかくぬやしるらん

建仁元年五十首哥よみてたてまつりける時

前中納言定家

うらみわひまたしと思ふ里の秋風よわか身ふるきとこに音そせぬ

恋の哥の中に　　後深草院弁内侍

思ふ波をそてにかくる露よ我身のはれとおもへて袖かれ

前大納言為氏

はそともに色も出す秋の風ふかくともにおもひなさは

千五百番哥合に

二条院讃岐

いそのかみふりにし雨につれて[illegible]人のおもふらん思ひやるし

遇不逢恋といふことを

光明峯寺入道前摂政左大臣

またのよをいとかれしわすれしにて我身むかしを[illegible]

洞院摂政家百首歌に忍恋を

皇太后宮大夫俊成女

まつる契りも遠さかりぬえてそのみちなれしの下葉

家に五十首歌よみ侍りし時絶恋

二品法親王覚助

よそに見し人のあきちにたちそひてかはらぬみちなれし草のえん

題しらず

前中納言公脩

いくかへの心乃ゆくさちにて吹よりて秋の心をいかにとふらん

九条左大臣女

移てもとゝまるかれのおとにきゝて人はまたなにをとゝめぬ庭のをもとふ

皇后宮内侍

なかすならて見るやこ梅の山おろしにこゝに忘れぬ枕なれと

家に百首歌よみ侍りし時忘恋

前大僧正道玄

こえねたゝ忘れてこれとのちの袖もあらるるさらに袖の白露

題しらず

権僧正慈仙

ねまてかきとまるそてまれに忘る月に涙なれ枕なほふ

大江廣房

とものこ何事に秋の末これはわれ月ひとつの袖そぬれける

源親長朝臣

月草乃花にそ衣をそめつ袖の涙よりまたうつりそめけん

左衛門督公敏

うつりゆく人の心はあさき色に昔ながらしみける花そかなしき

正安三年九月画の日ふしみとのゝ御会なり

て人々恋とさふらひて五十首よみ侍

けり時絶恋

左大臣

身はあさそうらみむかしとおもひつゝもくらすぬれぬといふ

恋しらす　よみ人しらす

渡りかけし逢ふ瀬をけふをかきりとす[illegible]の志らさ

本院侍従よつかはしける

あさましやかくこそは逢ひて衣手の袖のそなたは濡れは

返し　本院侍従

かへるさをいつもとそおもふさけし衣手すぬれし人の袂は

恋の歌中に　藤原雅朝朝臣

立かへりてあひ袖をぬらすらんよそになるとはおもひしを

右兵衛督教定

あふこともまれなる人の恋風よなくてなきたつ袖をみるや

平時元

志ら浪のたつまもなみしかもこりに濡るとて下りし[illegible]

前権僧正雲雅

人心あさみの浦に月をなかしふかきえにこそとひやなりなん

正三位経朝

あふことをまつにかけてしるみをさらにゆく末まて頼母

従二位宣子

いかにせんつれなきみのはてをなさけせぬえにちかふ心おそきと

観意法師

なきまてと契りしを忘れはありしまてなる中川の

唯蓮法師

かひみくとも人の心のかはる世にますさ袖ぬらす中河の水

大江貞重

とふことはかれてそやむわすらるゝふちせや人の心なるらん

前権僧正定[illegible]

夜出風をまつにそみしはふちの江の水こひそてもと月はこゝろ

平重時朝臣

みるめにかはらぬ波のうきさまてねまちにしとはおもひける

参議雅経

ゆきゝのかよひにしるしをあはしのねさそての契りもくちやらぬ

平宗宣朝臣

三重も草葉なる人のさそとても我月にかはる海世なりなん

丹波経長朝臣

いかにてとひみえかんと重ゆく人のくさわか身ともされ

嘉元百首哥たてまつりし時よめる

前関白太政大臣

しらて毎とふねやうの浪らくも忘心もなし宣まとをとれ

題しらず　源宗氏

三らて身をうらみのとこひしさんとひとつなるとなくなん

百首哥たてまつりし時

参議雅孝

なみのつゝ海ゝとりやらふとまれ浪もこふ宣ねんとかり

恋哥の中に

前大納言通顕

くやしくそ契りかさなけりなりくやうくめのそとみつ世を

よみ人しらず

とひやはんかうり木かよひちかよひくとのせさうすまも遂

廿袖のとほへうろ波れ見しをおもねひとの契りに

大宰権帥為経

女二友治部卿

ぬくのとたひそめは遂まかてくの色ほなとうくるん

津守国助

やつくにゆく妹風ゆくなんなひさそめは遂なみのとを

寛治百首哥たてまつりける時寄風恋

花山院内大臣

とはれつるたよりもおもひたえはてゝいくよの杜風そよく
思しらす

前参議実俊

頼まれてもなくとおもひこしつらさにもおもひたえねとつらき契を

権中納言實前

あはれとも人の心にかゝるやまつれなさにいつる契は
むなしくもとつもりせぬ人のゆくすゑ
しけり

中納言定頼

池のおもにおもひえぬよやこゝろみんいつかかはらん
思しらす

源邦長朝臣

山井にあさき流をたのみこし影見しまての契なりけり

為道朝臣

なにゆゑに袖ぬらすらん人心あさくいひつるおもひたえなて

安嘉門院甲斐

かはらしの人の契りよいつはりの世中なれはおもひえてけれ

二品法親王家の五十首哥に不絶恋

前大納言為世

つらさにてたえにし契とみなせ川ありてゆくへのすゑはたのまし

三十首哥たてまつりし時

権中納言為藤

かゝるみたらしのかはつゝるそかはあえぬ世のちも月にこそあれく

寛治百首歌たてまつりける時寄橋恋　冷泉太政大臣

うきやこのゆめのいはしなかなかにかよはぬ人の契りなきかな

恋歌中に　源兼氏朝臣

こひわたる心かよひやあさからんたえまかちなる橋の契りは

式部卿久明親王

あふことはとたえぬる橋のなか柱立そよりこひわたるかな

権大納言公敦

忘すよそれてしはのみこゝろかけしぬるとしの過ぬるは

禅心法師

みちとせもおもふ中のへたてかなつきせぬ契りもあらはれ

源義行

くやしともふたゝひとなのまねは誰に流さをなかしひかはん

永仁二年亀山院に五十首歌めされける時

津守国助

命をはあふまてとこそ思しかなからへはつらきのちに人はつらし

契しらす　前内大臣公

もろともにその世かきりと契りきて別れてあはすまてとこそ思へ

永福門院

おもふ世とたのむるころはいかはかりなかまてしとおもふらむあさ

権大納言兼季

恋しなむ後をもたのまんこの世からみをかきりける契りなりとも

嘉元内裏五十首歌に

前関白左大臣

ちとせふとちきりし恋の命さへまつほとはかなき今宵なりけり

恋歌中に

平貞俊

せめてなと其の暁をかきりそといひてし人のまたれさるらん

平宣時朝臣

いまはやよそにのみきく暁もおもかけはかりなにのこるらん

前内大臣

うしとたにいとひなれにし鳥のねを独きくこそ袖はぬれけれ

嘉元百首歌たてまつりける時寄鏡恋

従二位行家

岩そゝく川おもの鏡それならはうつる人のかけもみてまし

題しらす

二条院讃岐

今更によにはいかゝさ新枕としれみとせをもちわひぬれ

右近大将道綱母

こゝろにもあらぬちりのこつきさしもあまくさすゝしとそおもふ

平泰氏

今はゝやまちかしひとしくるまゝに昔にかへてぬるゝ袖かな

津守棟国

とふ人もよつきよひとゝもたのまれて契りし庭はあれにけるかな

藤原宗行

なつひきのてひきの糸のくりかへし逢と逢中そはかなかりける

為道朝臣

こゑまてもひとつになくはなかなかにかくれ給ともし

後二条院御製

もろかへりそひし衣にこゑてそとも月よなかりせはと遠

中宮

なかつきのひとつ屋にたのむ月きこゆるそきみそかな

嘉元百首歌よみ逢不遇恋

永福門院

なかなか逢見はてゝそとことにはたてゝも身にそふかけなきは

思しらす

僧正覚円

めくりあふ月はかはらぬ面影をいつはりかものとわすれてそきえん

弘安百首歌よみてたてまつりける時

前大納言為氏

面影のうきぬけりさてなかくまちしにあらぬ山のは月

恋乃哥の中に

くもともふかきにてよの面影もさらに恋しき山のはの月

大蔵卿隆博

重ねきしにあきをまちしも幾秋のふかき別とおもはれける

順徳院御製

月をすみて面かけやかはらんなきせてし袖のなみたに

信実朝臣

いまそしるねくらき月の影をやとし涙に袖やくちなん

永仁二年八月十五夜十首歌講せられし

時月前契恋といふことを

大蔵卿隆博

月とのみよのけふと思ひそよ契りしは恋ひわすなとゝ

為道朝臣

たのみこしふみよ面影も昔にゝぬ秋のよの月

題しらす

新院[illegible]御製

めくりあふ月をそのよのかたみとも人はかはりてもおもひそとそ

太政大臣

久かたの月のかつらのかけよりや袂のうへにうつりそめけん

参議公明

三かさ山我身そあらぬめくりあふ月は昔の影をとゝめて

前参議雅孝

なのつるとひや出つる人の心をしらせよ我まつ月影

法眼行済

わかれとはふみやしとうき面影に月そ流るとなかむらむ

義円法師

うき秋も今かきりなる在明の月世をそ涙にかゝりすとも

我元百年の秋をまてさりけり時忘恋

前中納言経継

人はことひも出しあふよ見えとさそふ在明の月

思ひしらす

廣義門院

在明の月ゆるみなかなねと別し人かきりなき道

在明の月とてよりふかく出しかはさそふとめけるゆかり

基俊

わかれとも思ひて別し在明の月をとてみをてよみ置

藤原為継朝臣

今出川院近衛

思ひ出る在明の月もとさこそはくらき道中かへる面影

藤原泰宗

わかれとも小なゐ道よりの月かけ面影のころかゝるとそなく

平斉時

忘れまよ風へとくれゆく月のつきにたる小我か面け

従三位親子

うき人ハつらきよはしの袖のうへハ月なれハとていつやとさん

弘長内裏百首哥たてまつりける時寄月

恋

前大納言良教

わかれともふみしもとほき月なかにもちらハ袖にかゝるなみた 見え

恋の哥中に

津守国助

いかにみしこよひの月のおもかけはありあけしのこひそふらん

従二位行家

秋よる(?)の月影とまちしもやうに人のみるらん

そのまゝに夢ちもたえぬかりいつはさしあかしよるの枕 そ

弘安百首哥たてまつりける時

前大僧正隆弁

うき身の袖ぬれしよまてていかにみよの夢まてことむなそ すす

恋しらず

平貞資

ゆめにまても夢の契りもあえよ契ぬよやくのつき ぬらん

中臣祐春

ねぬるよの契りはかなきうらみまてたにもあても夢にみせ よや

平氏

あふ夢につらきを秋やくはんいてむかしのおもかけそとて

弘元百首哥たてまつりける時逢不遇恋

前中納言為相

むかしそとおほしいほとよとの契とはいまも猶言葉さかせは

古今乃中に　今出川院近衛

見もしらぬむかしは言葉の知りおもかけしるき人の面影

中宮

いかなりしみよの言葉をつたへきておもひの世にも契りおかん

百首歌めされし時　太政大臣

我のこそおもひおくすゑの世まても言の葉も育てらん

皆しらす　前参議家親

今はまた言葉をそよまてにおもひそへしともこそあらん

弘安百首歌めされけるついてに　亀山院御製

知らし世よみかつまつりことおもひて言葉のみちある人の面け

題しらすよみ侍りける　正三位為実

言葉をそもまくおふとやかくとまもるまそせあそら

祝部成良

をのつからみやそのよ猶面影もいたる言葉のちきりなるらん

源重之女

あひみしハ夢かとつねによなよなに人まちてなかりさふ

平貞文家歌合に會後戀　　貫之

何せして別し人を夢よみてうつゝにさへもたつ涙か
恐しらず

友則

恋くりしひとをつまとハそのかふ(?)にほしひハ恋さ侍り

業平朝臣

とふ人もとさそハ今ハなきいはひ人となのこえ

宗于朝臣

年月ハ昔にもあらすなりまて恋のことなりさけり

後深草院少将内侍

恋しきなりのつらさに月ハいつなかれてそなく

藤原為明朝臣

ためしとりとあをとふあひしハ年月とてそぬ後のつらさなり

遇不逢恋を　　遊義門院御製

ひとよにてあふをつらしとおもひよる年月のつらさをおもふ

恋のうたとてよませ給ひける

亀山院御製

年月のあさぬつらさとうきふしてもなくとおもちつゝ袖のうら浪

續千載和歌集巻第十五

恋哥五

あひそめてひさしくなりける人に

平兼盛

ゆくへのみよしの山のみねの風のさそふにまかせてあなたなれ

いかなりける時にかありけん女のもとにいひつ
かはしける

権中納言敦忠

うれしさのきけさ海されは夜山乃あふかたもとなきにとふ

題しらす

前中納言定家

うきてよはまたいつまてかたのまむとなきたえたる秋の夜の
あせ

信實朝臣

としのうちにまつこそゆきのふりにけれみさほとともにそこひに
ありのやまとのゆきよりもなほたえて
まちしけり

兵部卿元良親王

いふことのはの山の口よりもそこひにかなしくもあらてなかく
おもはて

光俊朝臣よみ侍ける百首哥に

前大納言為氏

しまてしる契りしなかのかたみの松のつもるかなしさにゆかん

弘安百首哥たてまつりけるとき

しかるをみのかやまのつきなくしもありとさりかたのはつ
ゆふ

嘉元百首歌たてまつりし時 會不逢恋

法印定為

こえ逢し路ともみえは立かへりつきのちせぬおもひをも

永仁二年八月十五夜十首歌講せられし時月前恨恋といふことを

権中納言公雄

なへてまたくもらぬ月もとこまてなつきさ人のつらさ涙よ

恋の歌中に

平時数

今さらにつらさをいふとも袖さへ涙の月の影哉

平貞時朝臣

忘しとちきりし人のいひて逢見ぬによそなる袖の月影

永仁六年九月十三夜式部卿親王家歌合に

寄月恨恋

平斉時

うらむともみえし身のとかぬまはしはらく袖の月をも

思ひしらずや

藤原宗親

つれなくてなにとかはらぬ世にむかしを思ひそめぬ涙の月

衣笠内大臣

いかにせん人の涙にすむ鏡うつしみせよりもさけかねえぬし

嘉元百首歌たてまつりける時寄鏡恋

従二位成実

よしの川波よりまさるみなかみにふる滝のけしきもまつし

百ゝらめされしつくに

法皇御製

恨てもひとつ雲れおもし女いさりあらかえこそれつ

恨恋の心をよませ給けり

院御製

名をつしまてもみなめの御かきあさゆふ袖よぬらすらん

土御門院御製

しくるゝて袖そおもめかま風にむらくみよりそ切ふるあなり

従二位家隆

春のつらさも人のおもはぬむさとのしるへにふくるそ

悲しらす

平時元

いかにせんよそになるとの松か波そふる人もしらぬ恨を

権律師円世

しらねとも汲くむあさのぬれ衣ちゝみてあまと人はしらせん

藤原重経

こひし人をなきさはふやくしほのうき恨は月とこそすれ

正三位為実

月をいさてこひそはしてしるをひむなしき恋の恨せまれ

宝治百首歌よみてたてまつりける時寄虫恋

花山院内大臣

恨わひ我からぬるゝ袖のうへにむしにおとらぬねをそなくなる

題しらず

興風

なきとむるむしのこゑをもきかせしとむすひおきける露もあはれを

百首歌めされしついてに

法皇御製

うらみしは恋をうらみしきみのむすひしちきりよりたねのとなりて

恋の歌の中に

従三位光成

うつゝには契ありやとおもひしを夢のあふよはさてもすくさん

法眼行済

わすれてはおもひしらるゝ身をうらみうきをは人のこゝろなりせは

源親教朝臣

われそいとひなからゆくすゑなかなかの恨なからん

前大納言通重

としふかみえぬ身のほとはまつすゑを世をまつ風露はいふらし

弘安百首歌たてまつりける時

入道前太政大臣

身なれにしおもひをはゝしらすなとうらみはかりそ積るらん

題しらず

安嘉門院大弐

秋風に恨ふかしとはなけれとも露こそ秋は人にしらせ

洞院摂政家百首歌に

前大納言為家

おもむ里のゆふまやのこゑもなくひとりこゝろやまかせ風ぞ吹

久安百首歌に

皇太后宮大夫俊成

三室の草つゆふかくなりにけりすゝきが花に露をとて袖ぞぬれける

秋の歌中に

典侍親子朝臣

いふもの身をうきの哀さはおもひしりてやとふ人のなき

荒木田氏良

うき人の心は秋の乃しけ葉を何まちにしをりそめけん

賀茂経久

うきなからなれてそおもひし秋草にしく浅茅の露のゆくらん

平時邦

かりそめにむすひし袖の秋風にわかれしよりそ露もこほるゝ

円蓮法師

うらきる人の心は三重のなとふくらぬ嵐かゝらん

平貞時

露けしはぬれくやまの井の三重の玉すたれはみるけしき

大江政国女婦

よそにしてまつにしらふしらるゝ月のつきせぬそかり

藤原經定朝臣

今更に忘らるゝ身そことわりとおもひしらるゝつらさなれとも

權大納言實繼

むかしきゝおもひし契そうらみけるつらさにかへぬ命なりとは

藤原懷世卿

くやしきはあひみてそむかしつらさとも忘れはてゝ恨さりしを

よみ人しらす

恨てもかひなき物をうつりゆく人の心はさかなりけれは

今上御製

思出る人のまたあらはかくとても忘れはてぬる身とはいはせん

よみ人不知

一かたに忘はてゝそいつしかと世人の絶まやおもひしらん

今上乃こと家に申ける時五首哥合に

絶恋

權中納言為藤

よしや今はおもひな出そなかなかにうき身忘らるゝ昔なりとも

百首哥奉りける時

藤原為定卿

なをつらき思ひのほとをしられはや忘はてぬる人にいかにす

洞院攝政家百首哥に忘恋

信實朝臣

ミ御代に契りをかはらむむかしにかへん御代の世をさて人はいはし

恋乃歌中に　入道前太政大臣

今もいさつかへさらむやかこつらん我はなくてとなき月日を

平宗宣朝臣すゝめ侍りし住吉社三十六首歌よみ侍りし時遇不逢恋　法印定為

忘らるゝ人はよそにやあくる夜の月のつらさとにならぬかなしき

題しらす　永陽門院少将

忘られぬ身はまた世はよそにみし夢にてわかるゝみるかなしき

権大納言典侍

あはれなる契りをひとり忘れねと思ふもつらき我身なりけり

嘉元百首歌奉りし時忘恋　前大納言為世

うきなからそこはかとなくひとりしらぬ人そ忘は人の月もとはにこそあれ

百首歌奉りし時　左大臣

我のみや恋のこゝろをひそかなるさまに忍ひし人の心は

題しらす　二品法親王覚助

忘れんと思ふものからつれなくてうらみしことそ思ひしられけれ

新院御製

忍ひきこえしけふにそひしつるかないかにも人に思ひて御ましし

藤原経宣朝臣

はるさともひとりなかめぬ秋月そ世をてらしむかしをしのふしれ

藤原秀能

そてはまた秋月にそつゆもみおもひしそへのこさとおもふ覧

鴨祐敦

難波江はよるしほのかけさえてみつしほちかく月はてらすなりけれは

よみ人しらす

さらてたに月みれはなかめぬ人にとつしとおもふなりに

藤原基夏

うきみまつつゆさもさそしくらむ人ところみぬ人とも

前斎宮折節

みよしのゝ人わりそつかぬ月とはゝさのこなたにそみる

嘉元内裏百首歌に

前関白太政大臣

忘れすはおもほゆるなかに雨つきさえてかけもさやけき

百首歌奉りしとき

立かへる人のつきさとりもさやけき月かけとおもひしらる

後九条内大臣家歌合に

前大納言為家

うきむかしこひしきのかけわかれてをしみ涙そせきかねける

題しらす　権中納言師賢

恨とひはゝこれもしせるやなけきかは袖の涙と
よみ人しらし

流しともよそにみえぬとこそやおもふらんそれをたにしらし
平貞直

忘らるゝ後さへなをもしのひまて人のつらさをしらぬ身そうき

恨恋を　鴨祐夏

命こそたえはつるともうきにも我からの恨はよしやうらみんとも哉
従三位為理

ありてよにのこるこゝろもしのはしなふと恨の命なるせは

あはれ百とせまてまつりし内おもふ心と
前大納言有房

命あらはつらさにたえぬ身なりせはこの世なからは恨さらまし

恋歌の中に　前摂政左大臣

数ならぬうきさりかひなきなけきとも思ひ出ても人をしのはん
藤原為隆朝臣

あはれにもわかれんとおもひて人のつらさとうらみはてし
正三位惟継

流しともいはてこそ心よりふかき思ひあまりて恨はなれ
平宣時朝臣

はかなしとたれかいひけん桜花の淵にぞふかきこゝろはみゆらん

藤原範秀

秋ふかみちらさせてや人のつらさも恨はてまし

神な月のころ小白河にまかりて人々十首

哥講じしけるに恨後絶恋

権中納言為藤

うらみても猶やこりずましとおもふはかなきつれ契よ

建治三年九月十三夜五首哥に絶恋

山階入道前太政大臣

人のつらさもおもひしれとやあはぬまにいまはそれさへある身を歎く

百首哥よみ侍けるに恋

皇太后宮大夫俊成

なかなかにせんはしとも人を恨きん流くもさかまた袖

恋しらず

和泉式部

恨べきこともなきまで人を恋ひわすれといひて波の身にしみきん

家に哥合し侍けるに恋の心を

左京大夫顕輔

はかなくも人をおもふにはかなしみくなしとも

あくらめかせん

続千載和歌集巻第十六

雑歌上

巌松といふ事を

後光明照院入道前関白太政大臣

かねてよりちきりおけるは巌におふる松はこゝろのまゝに千代まて

嘉元百首歌めされし時澗底小松

法皇御製

色かへぬ松のみとりも谷にては埋れはてなはおひの身をあはれ世

前大納言為世

年ふりぬいかにそいまはふりて身は老となれる松のまつとはせん

弘長百首歌めされける時

前大納言為家

徒に老のねさめはなからへはわかの浦なみそことなくもなさけ

百首歌たてまつりし時

正三位為実

いつかはや君の恵にあはれつゝ人かすならぬきさをかけ

山中瀧といふことを

法皇御製

まけさいふかきやまのおくよりおちくる瀧のをとそさやけさ

布引の瀧を見て

西園寺入道前太政大臣

やまひめてなにはを中にたちへたてゝちかきしほやも布引の瀧

題しらす　按察使資平

おきつかせよはにやふけてなにはかたこたへしかせのふきすさむ也

元正天皇難波宮にわたらせたまひける時

井手左大臣

ほりえには玉しかましをおほきみをみふねこかんとかねてしりせは

題しらす　よみ人しらす

あしのやのなにはのふしをそへてあまのいさりの波よりそなれ

後二条院御製

難波えにかるかるあしのいつまてかよのうきふしにしつみはつへき

寶治百首歌よませたまひける時岸芦

太宰權帥為經

住吉のきしのいはねにむすふあしみとりにかよふ松のかけやそへん

題しらす　よみ人しらす

都にはをしむやなにはのまつのみの色もかはらぬあはれ(?)を

都元百里なるめされしつゝ小

法皇御製

いくとせかなにはのうらにやとりしてたれにかもらすわか身なるらん

前参議雅經にしてよしひきしつる撰集の

ころ鶯をよみ侍ける

権中納言為藤

春にけふあはしまたそむる鶯のおとつれすはねられさらなれ

嘉元百首歌たてまつりし時鶯

円光院入道前関白太政大臣

九重のはなのそのふの色に出てまたてきてなれし鶯の声

鶯の声をきゝてよみ侍ける

前大納言資季

我身世にふりゆくをこそとはすとも春をしるらん鶯の声

春の歌の中に

法務公紹

いつしかに我身ひとつの山さとは春をまちてそ鶯のなく

入道前太政大臣

春くれはとやまのみゆき消やらてわか老らくのかしらにそふる

正三位実継

山たかみみゆきふるまに花さかは春の光を見る

山本入道前太政大臣女

うめのせにうつれてうつるあをやきのみとりは波の色そみえける

平時村朝臣

色さそふまたさくむめのにほひをそ風のまにまにかよふなりけり

念阿法師

はるさめの老木のむめよ昔にかはらぬ春の色はのこれりと

寛元百首歌たてまつりし時梅

入道前太政大臣

色よりもかこそえてはしみそめし袖ににほふ梅の下枝

なかしんと

土御門院御製

うゑおきし梅はそのかやかはるらん匂ひもよそになりにし春

従二位家隆

ふるさとのおほろ月夜の春風よむめかゝほそすまゐなりけり

正応六年内大臣にて踏歌節会の内弁つと

めはべりて大臣辞してのち春月を

よみ侍ける

太政大臣

いまはとて雲ゐを出しいさよひの月のつきせぬ春そ忘れぬ

題しらず

大江宗秀

春の夜のあさみしかの梢そのまゝにかすまされける春の夜の月

前大僧正實超

あはれなりいそちあまりのちの涙むせびしもとにすむ月をみて

道法法師

かすむよの月は昔の春なからわか身ひとつのぬるゝ涙の袖

山さとにこもりゐて侍けるころ述懐歌

よみ侍りける中に

如願法師

庚申の夜歌とよみてよみちゆきふりに春の夜かな

おなしくを　法印覚寛

久かたのちの宮のしたしくも都の花におとらさりけり

建保四年百首歌たてまつりける時

西園寺入道前太政大臣

春雨はふりの草木をとふ〇たえはるさめては我身なりけり

春雨を　後二条院御製

あさみとり何まて〇さめにこそ色まさる野辺の草木に春雨そふる

待花といふ心をよませ給ひける

法皇御製

老の身に宿をとならへてとはゝさそひ春にもやみなき

寄花述懐といふことを　前大僧正禅助

花をみし身の思出をといはゝ六十の春とふへらんもの世の中なり

後光明照院前摂政左大臣

のちの世を誰か思はん〇花さもなやよせの春そへにけり

権少僧都能信

花はなやちるとも見えてちりそへる夜立田のやまに匂ふ春風

閑花といふ事を　平宗宣朝臣

あふ坂の山の桜や咲ぬらんくもまにみゆる世きの杉むら

遠見花といへることを　藤原隆氏朝臣

をちかたの花ともよそにみえにけりつゝきの峰の白雲

前大納言為世家にて三首歌合し

侍しとき遠見花といふ事を　清原長兼

白すみものとをしも白雲のさかりの山は杉やまさらん

見しらす　僧正道順

まきいりてこれなりけりとみえすはやまはもとのみねそ（みち）

能誉法師

あくかるゝ心のまゝにみえさせてやまちわけてそ花は見るらん

大江宗秀

をちかたのふもとも白ひもひとむらにたちそめぬみねの白雲

祝部成親

よしのやさくらもよそにみえぬこそおもひいてぬる峰の白雲

源重泰

吉野山花は桜かさしておもはぬ花やかれぬるの雲

祝部行氏

おすとも人よかへてん山桜かせにまかせといはゝとふとみて

中原祐親

花さかりにしら河の桜のもとに人々あつまりて

人々あつまりてゆくらんをそのたみちまかりて

よめる

山田法師

めくるさくみのはやふ桜をもこてられ春にあひすもなくて

題しらず

赤染衛門

思ふ人のあさなく山のはも雲もなく雑の山さらん

津守国助

あまそよりみつさへとまよひや山桜またにおちてたれの花なかりけん

菅原泰宗

このもとにあらぬのちも山桜のこゝはもれひとりなりけり

藤原定成朝臣

桜色にやまはけふこそうつろひぬちりかふ花もこのしたに

堀河院かくれさせたまうてのちの春花をみ

けつゝくに権中納言俊忠のもとへつかは

しありきてるをと中宮女房の中に

たてまつりけるよしこさてやれけりしも

京極前関白家肥後

桜花さくとやまちにふりけむもへちる人のなきたゝかれ

返し　　権中納言俊忠

白雲のむかふる峯もいかなれはとふ人ゆゑに浪にたちける

詞しらす　　中務卿具平親王

ちるとみてもいかしうちはへてさかぬ花をもまちそうかれ

万秋の花

さくらあるき世とちらぬのあるきは世にとまりさてとちる桜哉

花枝よりつけて民部卿資宣のもとへつかはし

けり　　光俊朝臣

ちるをみてちりゆくもとをしむまてのこころのうちに月と雲(?)哉

花のちるとてもあり

平行氏

まつことも春に老てたのまれはいつよりちるをおしき哉

よみ人しらす

月のまをみるとや風もさそふらんやよひのよともをしむ哉

平師親

吹風の花そつらさへいつきえんとそのちるそかなしき

前大納言為世よませ侍し三首歌に落

花を　　法眼兼誉

花はみなちりそめしほとはしら雲のあとなきよりつる白雲

弘安百首歌めしてまつりけるとき

藤原為那

としふれは杖にすかるのをかれはなにはもちからなき老の道

前僧正道性よませ侍りける三首の中より

首夏藤を

権中納言公雄

七そちのなかはにちかきふちなみもさかりしての老のなこりはまつへん

夕卯花を

伏見院御製

月とみてよつまやこえん夕暮の雨かかる山ゐに咲る卯花

夏夜中に

法眼慶融

世中をいとふやとはなけれとも身をうらみつもの思ひにいはさん

右兵衛督基氏

首夏そへてよるれあふひ草神のみかきにかけつらん

法皇御製

みちありてふるきをもとむ夜半なれはしけきことはそまつはらはん

後一条入道前関白左大臣

さゆるよのちまたの霜をやとしぬやきえんかたさに草の葉まよ

百首歌奉りし時

権大納言経継

なかなかに老の波のよるけさは沖つ白波のやまかはらにこ

賀茂定宣

つれなさも我もこえにし時雨ふりにし人そかれし

安陪忠房

とひねの夢さめても時鳥ゆめてもなほありし声をとふらや

藤原景綱

夜てよるまこそつらん郭公のさよ中の思ふそよそ

高階宗俊朝臣

まつれその山よりて時鳥おなしこゑはと人をまつらん

為宣上人

ゆふくれまてまちつるものを郭公夢ときゝてそおとろかれぬ

藤原秀氏

よひのまに月まちいてし山のはに鳴ともきかぬ郭公哉

平義政

時鳥有明の月に山のはをいそくよふかきそらになくや

真浄上人

一声を人まつきよ郭公さて行すゑもとふこゝろかな

藤原長経

さけはまつ袖にかをれる時鳥花のまにや人はなつかしまん
夜て郭公とふよと

藤原隆祐朝臣

夜てとこそひなきてそ時鳥なれも昔に思ひかへらし
聲しらす

藤原時親

时鳥花たちはなにさこゆやむかしこひしきねをなくらん
五月闇むかしいまのまとのもとにゆく
つまけるおしさにあやめまつけて
贈従三位為子
ふるにも昔とはけし時よりそのねはなほもわかす
此返し
万秋門院
我のみと昔をかけし袖のうへにまたさねもそへ
出家のちかきをつまさりける人のもとへ五月
五日ゆかしぬのねをつゝみすとて
入道前太政大臣
あやめ草うきをかけても墨染の袖はかはらぬねをそなき
返し
よミ人不知
すみ染の袖よりかゝちてあやめ草ねをそへそかけさせ
前大納言為世よませ侍し春日社廿首
歌中に
法印宗因
あやめの花もまれぬやとなれはなに昔をとひ出まし
盧橘をよめる
平宗宣朝臣
いにしへをしのふる人の思ふとて我袖にしも移る香もかな
祝部成賢
匂ひくる花橘の袖の香にみさと人をもむかしこそすれ

弘長百首歌たてまつりしとき五月雨

前大納言為家

五月雨の草のいほりのよるの袖しづくもさこそやつるらん

題しらず

西音法師

うきことを世にふる身とはわすれぬる草のいほりは五月雨の空

平貞宗

志かまねひとり雨に袖やぬらすらんあまりに雨やの五月雨の比

大江廣房

五月雨のころもほどなくはれにけり山のはしらみ見えつる月のかげかな

真昭法師

みじかよの月にこころを猶かけてあくるをしめし

文永百首歌たてまつりし時螢

前大納言有房

あつさにはよの螢のひかりにて思ひよりをる身とてすむ

題しらず

惟宗忠宗

風すごきもりのかげの夕まよひやまかげしげし日かげの数

静仁法親王

見えそめし草のかげのゆくへもしらでやらさせふ露

水邊納涼

後二条院御製

涼しさは立よりてもむすぶての袖にせゐるゝ山の下水

世をのかれてのち六月つこもりころの日よみ侍
けり　惟康親王家右衛門督
みそきそやくとせまかりかへりきぬる命かは
神様乃ふそ　権大僧都聖尋母
みるまゝのまえあしのひとよのふしもなをこそ玉枝の風
秋のよこの中なり
平時夏母
せひやはよそまてなかし七夕の逢まつ河のせゝのふし
前大僧正良信
いかにせん嬉しともあはぬ中にへたてのこす月にはおる袂と
紀宗信
ゆめのよの淡のとかけの露まもおゐる花の袂と
津守国夏
白露のはなにそとゝめてゆきなけれは聖への妹かな
中務卿宗尊親王
おきにしも太くふかきさりの果にそ月の秋のの重
伏見院御製
吹風のうきにかけてやとてにはまさる中に夕の蜘のおきまと
後二条院御製
やふしもその秋風のふきしより袖まなをかね露の白玉

前大僧正良信

人とそふる影のこゝろ草葉と秋風に露そこほるゝ

前大僧正道玄

心なき我身にちかく露や葉に袖のうへにあまるらん

家に五十首よませ侍りけるに述懐

入道二品親王性助

世中は秋の草葉と吹風の露もとゝまらぬものにそありける

瑞明門院に過敬におはしましけるころ

庭の草むしきりてむしのなくをみす

みえ侍りけれは人のりにゆかりつゝきける

常盤井入道前太政大臣

よをわかぬ露のかけてもしのふさやきみかさこやとの庭の芝生

返し

よみ人しらす

数ならぬ人のよもきの露やそ袖にあまるとも

正治百首の歌奉りけるとき

式子内親王

あまのはらふかきこの空にさらぬ浦にさす月の袖

前太政大臣実

露ふかきひとつさよやまに庵りの袖にとまる村雨

たゝたゝ

いくよわれいなはの世をすみはしめて霧ふかき谷にね覚しつらん

兼空上人

秋さそとはまたとしや汀の松にたつまつしほれ哀

今出川院近衛

見し人の跡の松ね覚かるゝに志らの孫とゝき山里の秋

天喜二年四月蔵人所哥合ニ風

よみ人不知

まつ人もなやとなましと松風の吹くるよいはいつら秋ね

題しらす

大江政国女

あし火たくなら山の山かけ桜月まつよひの空ふかくしてそ

藤原親範

名にいるも見えまの桜風とならは出ていつる月影

行胤法師

嵐吹峰よりはらふ雲の間にかゝれてかつ出る月影

月送客といふ事を

前僧正道性

ゆふさめ袖まて月はうつりてひとりおもふか秋の山ちに

山家月

津守国平

まつ人のかよひし道もたえはてゝいかゝやまもる霜の月

秋哥中に

藤原頼景

雲はれおしの山風ふけとふかくる里に月そすみける

源親長朝臣

秋をへて人もとゐぬる涙せにいくよか月のひかりをもみん

行観法師

しほのあまもほさぬ袖に月さえてくもふかきことをおもはせ

百くさの秋そてまかりしとれ

入道前太政大臣

かは川つさとをりともなきさ浪路月みぬ袖はぬまぬよの

前大納言為氏

月のこゝろにまかするへきよし

中けつるほとを待しきりそれになしゆけはつゝ

けつ

平親世

契りをく月のはしへたてさゆきはめくりあふへきなのこし逢

返し

前大納言為氏

山のはの月はいかにかにねまてしとめくりあふへき契をそまつ

契しらす

祝部成久

おもすゝ袖の涙よるまてにかかり物思ふ比の秋の月かけ

平行氏

やとるとも袖にも枕の月あれはうきさ身なくはむすひなん

本如法師

うれしとも思へはかゝる涙ある身をなしてそ月はみるへき

月前述懐と　　前大納言為世

いく秋をそへても身はふるき道を忘らすも月の影かな
弘安百首よりかさねてつかへける時

二品法親王覚助

雲ゐにてのとけき空に照る月もひさしき世の光とそ思ひしらるゝ

藤原保能

見るまゝに光もまさる夜半よりもいりぬる山の端のあり明の月

法印静伊

誰か又心とゝめん清見かた関もる浪の松のまねつき

中臣祐殖

はやきなるをそはとめて清見かたかけて月に雲ゐるそ悲しき

法印静伊

西の空はなをのこりけり影もまたよそにまちける浦の在明の月

法印清寿

しき島の袖に秋風よそにはなれてきけは哀なる也

大江経親

寂しさもふすまのうへにやるあさ夜井まてや秋をむかへむ　らん

前大納言基良

わか袖よりとまりふる涙とみよと月のかけまてこそ　らん

源清兼朝臣

なまほかにもそみえねむし時雨そめて人まちかほに紅葉

大中臣永親朝臣

身にしむと思へはいと世をあきに袖の時雨のふるも涙哉

清原元輔

色はやく紅葉そめこしのあらしの山の時雨のふるさとならは

紅葉を人のをりて見せけれは

菅原孝標女

いつくにも思ひしれとや我やとの紅葉をちらす時雨ふるらん

永仁元年亀山殿十首歌に幽居暮秋

前大納言実冬

よそにみつすみかなとをりもしあらしの時雨紅葉と

見しらす

中原師宗朝臣

人まつゆく秋の名残は山風のことはや紅葉ちるらん

後近衛関白前右大臣家歌合に朝時雨

高階成朝朝臣

あまねしとて嵐にはらふ雲と見えにしてふる時雨哉

権中納言公雄

なかれよの花の枝見えし涙にぬるゝ袖にふる時雨哉

三十首歌よませ給ひける時初冬時雨

院御製

まふりの河なみよなかのあめふりし木のはも秋よそあさてそ

時雨を　　　　　前大納言基良

いかにせんあめのむらくもの河なみもふりてなかれし秋の瀬と

大江廣茂

志くれされとやまれのふるきこ雲ゆくえみてふる河なみ

中臣祐臣

これやこそ河なみとなせにゆきさめて雲れゆく冬の月

丹波尚長朝臣

とあらしてふきにぬねとみつくつのましるゝかくさ山

大江貞廣

ゆきての河なみさゆる山のはに雲をさそふそなかりし

神無月のこらむおいそのもみちとて

前大納言俊光

我身よにふりそなりたるこゝろまことやなみとふる淑か

路落葉を　　　　　藤原秀長

ちりつもるもみちのまにゝみちとはまてまわれなるへきか山人

冬哥の中に　　　藤原経清朝臣

こけ衣あさを袖にむしもつれへふりゆく霜とをりしそてを

前大納言為世人にすゝめ侍し春日

社三十首歌中に

前大僧正道性

ゆくとても秋よやとまれ霧たちさそふとしのこゝろなきせ

弘長二年亀山殿十首歌に朔寒蘆

前大納言為家

なにはえやあさなあさなの霜よりてのこるともなき芦のむら

影しらす

土御門院御製

色かはるのきはの草葉の霜よりあはれなかきとふ人もなし

永福門院

あまをとめ袖ふるよはの世にしても月と雲ゐにたちやかへらん

権中納言兼経

はれやらぬあしの空の雲まよりまた見えたる月影

よみ人しらす

うら風やゆふしほはやくたつなみのよそにかゝれる浦の松風

藤原範秀

うつせみのからにみえてもなきことにまたあはれなる月の夜の雲

津守経国

いまはへのわかれの命ながらへてうきこゝろのみまさるとそ思ふ

式乾門院御匣

世をいとふ人もやあるとたつねても世をうき山家

弘安百首歌めしけるついでに

亀山院御製

まつの海やみさきの千鳥なく声してなきぬる夜はに昔恋しく

宮のふくつりまて御まゐらする性助法親王に
ありてつかはされける

昔よりまもりかはすたのもしさ人の位そ宮にみるへき

御返し　　　　入道二品親王性助

身のうへの心の色はしらみえて宮にしらるゝ君か光に

前大納言為世よゝまて御し春日社に

家中に　　　　法眼行済

君か世にふりそてになる老か身もやましたくへ山の白雪

嘉元百首哥奉りける時　　　　二品法親王覚助

ゆく雲もいくへかはらむよしの山かけは昔のまゝに下にて

題しらす　　　　頓阿法師

つかへこしいつは山のゝ宮の世にはゆるさぬみちもまさきまて

よみ人しらす

ゆふかけのかけともみえてかゝやくはみてらの宮の暁

燈火と　　　　前大納言為家

きえすとてたのむへきさらの老か身にのこれるねやのともし火

歳暮心を　　　　藤原基任

花とのみつもるをも志らていそくまに首ゆきのいれそ忘れき

嘉元百首哥たてまつりし時　歳暮

津守国冬

ゆきめくる月日もなれは猶とくるとそてとしもくれにける

題しらす

従三位氏久

こゝろをもこめりとふるそまよりいつくの春にあふへき

嘉元百首哥たてまつりし時　歳暮

二品法親王覚助

くみ山そもとめぬ志もかさなりてなかきまゝにくるゝとしかな

弘安百首哥たてまつりけるとき

前大納言為氏

いまは身のゆきにつけてもいそくらしにつもりぬれは

花のとしもふりはて

續千載和歌集巻第十七

雑歌中

弘安百首歌めしけるついてに

亀山院御製

あさみとりなかりしの数よりもひまなかりしのかんとなり
山月とふくとよみの世にしられけり

法皇御製

心とむなとやの山乃松の月ふりてひ世をすてしつ哉

百首歌のめされし時

権大納言宣房

さすかなほたのみしとふかきをすてこやれ山の月やみるらん

題しらす

山本入道前太政大臣

法のふみさみちをもとへはいさとうなみにのりて月をみるかな

前参議能清

位山月は志をもまちけれはかのみねに月そさやけき

権中納言公雄

墨染の袖に涙をかけまくも月を見んとはおもひかけきや

弘安百首歌めしけるついてに

亀山院御製

身のうさを歎く涙やくもるらん月も昔に袖にうけとやとさむ

題しらず

宰相典侍

うきなからこの世はなくもすみ染の袖にも月のやとりけるかな

前僧正實聰

昔みしかけはそれともなかりけり老ぬるのちの秋のよの月

太政大臣室

身のうさをなけくなとてや数ならぬ袖にも月のかけやとすらん

権僧正道玄

なかそらへてらしもはてぬ世をしりとすむ月をも山よりそ見る

談天門院帥

後の世をなにゝかへりん世の中にみえぬ山ちの秋のよの月

法性寺入道前関白内大臣の時の歌合に

暁月

藤原顕仲朝臣

山のはにいそきないりそゆふ月よ紀月多くもそ世をは経ぬる

秋のころ述懐歌よみけるに

如願法師

世を捨る山の嵐の音すさにいつそすめる在明の月

月の歌の中に

円光院入道前関白太政大臣

としをへてふるやまの松まてもとりとなれる月の影

従二位氏久

山さとにまちこしかひはいそれたてとて

ゆくとしハこれもうき世をわたるみとてなにいそくらん

前大僧正道玄云勤寺よ子日乃山家

しておける春のこゝろやつらしきを

源兼氏朝臣

いふてとひ来しま世わたさとつゝる雲の如くの出ちに

起し

前大僧道玄

数々とてとふあんなかしくハもの行りのおりをさくさて

題しらす

廣義門院

なのつもりぬへかさなる吹の嵐よ海わせてそみ

高き松と

前大僧正道昭

代ゝあら礼をとつゝまて吹の影かくのるは松の一りと

離山のち家把述懐とよめ

権律師浄弁

なかに浄さわつものをはみ木のことて山みえぬ山よんとくへ

題しらす

よみ人不知

おもひの世の中かの岸のいかすまてとふをさいわると来り

同題内侍よつらしけり

九条右大臣

とひやかわりのるけさ山里ハ袖露きてもあらりまた

此智かくいわりのもしらかうさつまてかな

前大僧正行尊

さひしさや峯のいほりの風露けさをつゆにもみえとたのむ也せは

述懐を　了然上人

世をいとひて入ては山の奥なから猶もくるしき此世也けり

嘉元二年百首歌に山家嵐

前大納言為世

山ふかみ峯にふきにし嵐よりそらにもいほりとはれてふきくれ

二品法親王家五十首歌に松嵐を

法眼静澄

さひしさは松の梢を吹おろす嵐にたえぬ音の若のかな

人よりもなをと山ふかくすむいほり小世をいとふ程はあらん

題しらす　宗厳法師

洞院摂政家の百首歌に山家

藻壁門院少将

山ふかく君ひとりのありとてもさひしと誰かたつねこん

松嵐を

法皇御製

君きてみるもなを松風の吹いたはまつむかしより嵐の音はいは

貞治百首歌に山家嵐

衣笠内大臣

山かけのまつにたれとかそあきこれはみねの嵐の音にまかせん

山家を

後光明峯寺前摂政左大臣

世のうさを思ひ入むまてはなけれともすみなれにけり山の奥哉

津守国助

山里はこころのとかにときゝしかとすまぬ人のみえもこそしれ

法印良宗

とふ人もまれにて後はとものかくれはなと山さとをこそ住世なれり

権大僧都良雲

山ふかく入し世のうきとこそ人とも涙そまさる墨染のそて

延政門院一条

心をもすてゝとゝめつ山里をとうき世いとふ人やなりなん

入道親王尊円

山里はさひしさとこそいひしかとすみはてぬれはなれぬ秋かな

平宣時朝臣

山ふかく人のゆきさへたえぬらんけふにかはらぬさひしきいほのをた

惟宗時俊朝臣

やまさとや誰にとひて庵とそへるかよふをきゝけふもなし

寛喜三年大和紀よなりてよみける

中原師員朝臣

ことの下れんのやま庵これやおもふことをてすむほけ紫

西園寺入道前太政大臣に仕侍ける時

ゆつりけるに　　前大僧正慈鎮

うれしさもなけきもみなひとつ袖にあまるこの身にあまりぬるかな

なし　　西園寺入道前太政大臣

袖にまたとふてひなむかしゆくさも秋月ひとつとふかめに

皇后宮歌合とやけるとよみてまつり

けり　　殷富門院

おふともいそかへむ月日まちのまもかはしとゝまれ

侍りし　　皇后宮

このはいかは月日はつりかともおもひそふとなのこゝろせめ

大炊御門右大臣ひさしうまかりつまこすと

うらみ侍けるに　　大納言實國

いまはたゝひとりおやこゝにおゆくはまもおもひつゝとさ

老のちからも升て侍けると人のおもる

てゆるしさかりけれは

清少納言

とふかくありしこえてひそね我やかれとおもふまゝて

忠義公かは宮にまうして侍にとふかひまう

つまて侍けるとよろこひけまいは

左近大将朝光

きのふかとおもふのどけき過ぬれはあはれにもふりぬる身と成

近衛大将にて侍りける時さそひて侍りける紙を見
て

前入道前太政大臣

これぞこれおもひおきし跡のもちつきまもるかみをしらなん

嘉元百首歌たてまつりし時田家

太政大臣

賤のをか田のかりこしまてとゆく人のたえぬ世にすむらん

述懐の心を

法印業昇

いつまでか月日はやすく老の波みよするみきはにみはなさき

従三位行継

わか玉のをしさてこそゆるされいそちかみなとを袖によせて

言絶よあまの志ほやくとたえつゝころ

末の松とはさてたへのまをたつらしきか

紫式部

よりの海よ志ほくむあまれならやくとふか衣越やつむ

相しらす

相模

こぬ世そとおもひさためしと命にさへかはらぬものと絶れ

藤原清正

命をはおもふまゝのとゞめてもかれ月ならめかはなかくそ絶けり

法印俊誉

限ある命なりすらなからへてなにのなかめとも見ん我身は

平親氏

いきて世にありつるまゝの月は身をさまとて此命かな

前大僧正道玄よませ侍りける歌に述懐

と　よき人へ志し次

つれなくてよに長齢の月をこそ見め我つかりつれ揺しか

題しらす

法眼親源

うきことにたへてつれなき命とも老のちからそへしもふかな

藤原則親

なまてもほとなき老の身はなるにつきてみるさはかなさ

丹波長有朝臣

ありかりやままてかりの命とてやそちあまり身を歎くらん

権中納言公雄

いとはしなうきこの世の六十ちにはやさてこそはまた

なかく百とせまてありし時述懐

昭慶門院一条

身のうきの世にふりしくふるすかな末もいかに歎かん

題しらす

津守国夏

わかまよふ身をなけきめてとく世をやすく末しらぬなからん

藤原長経

はるとこそ行末まてしられぬ身なれともなし昔なりけれ

よみ人しらす

身のうさをと思ひ出もそらき時はとかくれのこゝろぬる袖哉

惟宗行政

いまそとも思ふにおちて袂哉あるも命なるのまゝなる身は

前右兵衛督基顕

うきるしやとしとおもひてうらみぬとつらむもとては命なりけり

春宮権大夫有忠

そのまゝにあすとしらぬとたのむかなまてかゝる身を歎つ

嘉元百首哥奉りし時述懐

民部卿實教

年月の行にまかへなしはてに行末もさてやすさみえん

遊義門院

たのしくを

なへて世におしむ命もたのますくてうき身なれとさては

天台座主慈勝

うきことは世にしられぬの身ひとつにこそともおもひて歎くらん

平宗宣朝臣すゝめ侍りし住吉社哥の中に述懐

法印定為

数ならぬ世にも人にはてしも遁我身なからにおもはるゝと

述懐哥の中に

前内大臣公

おほかたの世をしたかひ教なき身をおもふかな
平貞宣
身ひとつのうきにおもひてやなきかな人のいとなむ世之世ハ
平政長
うきことに身をしつめてふかきすみの法の世にてねんころなり
度會延誠
うてよにうきをもてひとゝおもふのなさけを身にしるかな
平氏村
いさこそ我ま歎くにしのちの世をいつふせんとてたむけぬる
よみ人しらす
うき身にハ法の世をたに歎かなき道しる人そおもふなりける
源親長朝臣
いかにせん法へしまよひ道ゆくて身を救ふとて世々の務を
後光明照院前摂政左大臣
よそちあまり三代まてなかき歎てたゝひとつきまて身をそおもふ
百年あまりあまてまつりし時
前関白左大臣 押小路
代々の法をうけつかりふさすれはひとつかけるまさ身をおもふかな
題しらす
中臣祐臣
代々のあと法と人のおもふかとも身にそのまゝ人しれそなき

三十首歌よみてまつりし時

前大納言為世

いとめてぬき侍しことふるもわすれし道のみちそかなしき

述懐のこゝろを

中原師宗朝臣

ともよはなふゝのとゆつそとしへいにしへの代ゝにかへまさ

寄鳥述懐といふことを

源有長朝臣

しつらめや子とおもふ庭とりもなれつわか世ふけゆくをもおと
驚しらす

前大僧正守誉

さてなるも老のね覚のおりのねよ涙とそしる暁そなき

法印俊誉

しのふるのね覚なりしては世中にすてぬ身をとしる時やかへらん

前大僧正實兼

行すゑも思ひのこさん秋のよはおくりつまは老のね覚よ

法印良榮

こしかたの暁ことはしのはれなりけすと老のね覚やねかしまし

法印円伊

ときのまは老の寝ふりはなかめるをまちよかし暁の空

権僧正道意

さてはの夢ふかとなくはかなくなりぬれはふりはてらまれ

権僧正覚円

伐ぬれは海より夢のなかにていつを限のはかりなるらん

有大覚而後知此其大夢也といふ心を

太宰権帥實香

夢みるもゆめそと人の世はぬるもひとめさめぬいつかさめなん

往事如夢といへる心を

法眼行勝

こゝろのみ思ひねも夢かはかなきとおもひてといまは昔し

題しらす

太政大臣

おきゐても夢にいてもとかくねむるそさめて遠さかりぬる

百首歌奉りし時

二品法親王覚助

あめのうつゝ世のやみをも照しけるは光の昔は夢そさき

日吉社にたてまつりける百首歌中に

前大僧正慈鎮

ねかはくはとりてたのめそいくよも照らさはわかこゝろの雲を

題しらす

権少僧都叡縁

ゆきゝ海の嵐よりかけてまちおもふりとくいのおほひ

太宰権帥實香

橋の木とはおもはぬ人にとをけしはおもひしかね月にてさき

藤原保能

我宿のすみの竹みなとせしらぬ行すゑをそ思ふ

百首歌奉りし時

前関白太政大臣

これまてもなかめそせしそ雲の上のよのなかの月

昇殿をのそみ侍る人のもとにつかはしける

丹波長有朝臣

世ゝをへて絶えし雲井に今日まてもたちかへるや

返し

従三位親子

よみすてしやとの昔は忘られて我すみの松そさひしき

位山そてかはらぬみとりの松はまた一しほの色をしらせよ

従二位隆氏

寄道述懐といふことを

前大僧正道昭

三笠山のそみてそのみちはおふし嵐にまつつけてそ経て

弘安百首歌奉りし時

前大納言経任

ゆくすゑは君にわかせの瀧山にむかひていつくみるらむ

嘉元百首歌奉りし時

一条内大臣

立かへりまたも世にあふ坂のこゆる雲路に末を思ふかな

百首歌たてまつりしとき

関白内大臣

はるとりとおもひしにいふことをたかちあらむ代の中すまひ家

中納言経継後月はかりてのち吉田家にて

よみ侍ける

前大納言俊定

いかにして昔よりこむ白川のおとにのこすとも人にしらせん

嘉元百首歌たてまつりしとき河

前大納言為世

我までにいくよかすつゝ家のかせきを末かゆふせをきゝ川

権中納言公雄

いまも猶ふるきならひのあとゝして昔をうつすせり川の水

述懐の心を

亀山院御製

はかなくも此なゝそちのおいの世にあまたのことをおもふすゝみか

前僧正公朝

うしとてもあるへき身とはおもひしを萩原寺もこひしき

寄瀬述懐といふことを

法印禅隆

涙川うきせをしらはしつめてやおもひしらぬをなけきかなしむ

嘉元百首歌たてまつりし時河

前大僧正道玄

はるのよや月とちきりのあまつほしは君か代々をも照らすなるらむ
光しらす

前僧正道性

一とせにきえむ秋の月なれとひかりにふかき世々をあふくは

源貞将

とことはにいはふ世をしもしつめぬるおもひそやまれはふる道
くり

参議雅経

まくらのことひつりきぬおきつ波きてもよるへきみやこ
こそ

新後撰よりまてしるす

平貞俊

いつくにかかりにすまひもこゝろなきみをはなれて浦波

為世あつまにまかりしに式部卿親王に
らひは平貞時朝臣と代々のあとゝひ
をしへすこの道の師範をさためられ給し
時世とさそへりてかくよみ侍るに浦々と

藤原宗緒

この道そあつまにふかきもしほくさかきおくわかの浦波

前大納言為氏続拾遺えらひてのち石
山寺にこもりしにかゝるまゝ世をはけしきの中に

惟宗忠景

わかの浦にあまたこゝろをみかきつゝ玉つしまもる光のかずかな

題しらす　藤原忠定朝臣

いかにせむちかひおもふかたにしられてあまのかはらをさしてわたさむ

藤原業連

世とゝもの波の下草ふかきまてたのみをかけてぬるゝ身をしれ

度会朝棟

あまのかはとこよにちかひの橋なかのこれ

玉葉集よりのちとりしをはしとおもひけるをよみける

権少僧都継信

おもひねのこゝろもしらぬあまくもにたちてしつむ瀬によるそかなしき

浄橋寺といふてらにかきつけ侍りける

常盤井入道前太政大臣

あまたゝひちかひときくをしらぬ橋にてやはわたさむ人をわたさん

みをしらぬ法のはしなかれてわたれはよみ侍りける

順空上人

こゝろさしたゝりわたりつゝしらぬちかひのはしをわたさん

弘安百首哥たてまつりけるとき

民部卿資宣

なかきよにふる身のはての橋柱なをありかたき法そわたらん

題しらす

権少僧都実誉

る月とゆふのあはれにいつくに思おほしてよみてや給ひん
藤原隆信朝臣ひさしくまうでての
ち殿上ゆるされて侍りける時申つかはしける
後徳大寺左大臣
いかはかり道ある人と見てまもれはもとある雲ゐにかへし
返し
隆信朝臣
とゞめしてゆくこゝろありおもひけ橋はなき身とみえて
そひとつ行さき

続千載和歌集巻第十八
雑歌下
題しらす　中納言朝忠
世中はうきふしのとおもえてあはれ昔になりもゆくかな
よみ人不知
みなれてよなれて雲のうへは月光を袖にやとして
普光院入道前関白太政大臣
いまへわかみやなとゝてまし月はおもへぬ昔ならせ八
月催懐旧といふ事を
藤原忠資朝臣

みしともかはらぬ月の面影やあかぬなかめのむかし恋ん
あへ月とふらすと

近衛関白前左大臣

昔をおもひ出やとぬるさとに影もる月にそやとるまし
後におもしろかりける時七月七日人々に題をさくりて百首歌よみ侍けるに対月

懐昔といふことをよませ給ける

後二条院御製

なかめつゝ秋も昔とおもふかな月さへてらす我かみそかも
西山にてよみ侍ける時によみ侍ける

慈道法親王

昔とこそ見る宿の月あはれやかはらぬ人に涙の袖

題しらす

雲禅法師

いく旅かかはらぬ月のやとるらん跡はむかしの庭のあさちふ

珍乗法師

見しまゝにかはらぬこの里なれや月は昔にかはらさりけり

法印玄守

何事もかはらぬとこそたのむらん月は昔の秋もこそあれ

西音法師

みしはまつ波かへりてみなせ川かはらぬ月の光ならなん

雨中思昔といふ事を

因光院入道前関白太政大臣

昔こそ光の跡はよそふりの我身と雅の忍ひなりけり
思しらすや

惟宗忠秀

いにしへの聖の代にしたくまゝの思ひ出ても袖ぬらしつゝ

清原雅苑

行年は六十にかりのゝ風に猶ぬ老の身そうき

丹波長有朝臣

思はわつか八十あまりの老の身は誰とかたらんよのむかし

愛光院入道前関白太政大臣

あはれなり思ひよりとおもひて昔をとへは老の身は
人しれぬ五十そちめしけりつくに

後鳥羽院御製

みをしらぬ昔の人の恋しさにこのよと欲あまりぬるかな

懐旧の心を

前参議雅有

昔まてとをいひすきぬあはれの身とし恋のかき

独懐旧といふ事を

藻璧門院少将

あはれとも誰かはさらん人知れぬあはれのちぎりもらしつゝも
思しらすや

天台座主慈勝

数ならぬ身もとおもひさやかにさりにけるかな昔を

よみ人しらす

行末を頼みしこのまことはいつを我身の思出にせん

岩藤姫君

三とせまて我その思出もなきものをなにゆへ思ふ昔なるらん

藤原盛法

今更に昔を何と思ふらんうき世とてこそいひまさるらめ

祝部貞長

とほかりのといへて思出て思ふらんよるそむかしは

藤原基有

思出のなきをとかむる我身にはこゝろてもなを思ふ昔なるらん

後光院入道前関白太政大臣

あはれ身のまゝにとたのみにかへて昔をみきと誰にかたらん

深草なる所にまかりて夕懐舊といふ事を

とよみ侍けり

民部卿實教

なからへし昔なりせは深草の里は里ねといひそすまし

題しらす

祝部行氏

老ぬれはむかしかたりもいまは只のちの世しとそ歎みかれ

二品法親王性助

忍ふまに我身よなりゆく今をさへ思ひ出てもなに思ふらん

伏見院より廿首哥めされける時述懐

伏見院新宰相

よそにのみすねおほえしみちもいまはそむくとはおもはぬ身の老のならひと

遊女乃心を

平斉時

ひとよわかれゆき人のなれつまにてあひみる契なりけん

題しらず

行蓮法師

そむくよにかゝるひとりの山みちをかた日ともいはおなしたのめと

前大僧正源恵

そむくへき物そと世をはいとひつゝ心からこそや誰もとまらん

よみ人しらず

山ふかく世をてはなれしかと我とそむかぬうき世なりけれ

何とかくむかしよりいひけるはいとふなるへきうき世なりけり

前右大臣実

しをすみし身となりなからなかりせは世にもあるへき我か身なるらん

明玄法師

身をもひとそむきうき世とおもひつゝはいかにいつる身を経ん

法橋胤真

うきにひとなき世をとこそ心にも数ならぬ身をすてはしれ

平貞時

うき世へし世にしのはねは中々に数ならぬ身そすみよかりける

賀茂基久

うきて身はなきさにつませもいとはすはまに世をとそむかれやらん

平宗直

さしあたるさなくひなすは世中はなきさやそていとひはてまし

藤原重經

いとひてもそのちいはふにとふらなくて世にとゝめん心はけし

菅原頼氏

世をとふかすにのへそ見しのなき月はすゑも猶あれて

前大僧正教定

いとひてもなほとそぬる身なからさき世へからく山やなからん

中臣祐春

一すちに山のおくともいそかはやうき身そそへぬへきものかは

源澄泰

うき世をはいとひそそむきぬおほはしの心は山のおくにあとも

昭慶門院一条

いつまてかたのみて心よはからんのへさふれやまれみの白雲

平時常

たてつくむほとくへき世はかさといとそいとひ身をもたのまれめ

述懐の心を

権大納言兼季

ありそそぬうき世のなかはかるのやといはくにはさきて心とめん

院御製

しつやまさくやましけみならはしのしよそともおもふ道
なほかへよそむきしやらてさてこそんふとむかしこの世かね
をしらす

前参議雅孝

あはれとてたれか身はしや吉野川やまこそのよそにいとひそめ
ん

示證上人

うれしともかりそめなりと思ひすつるを限よ身を歎き

権大僧都慶教

しらすやな世をいとふしみにそ身ひとつうき心にてそかはるなれ
るら

平宣時朝臣女

身こそやみのままにかなはねよそのつまに
あはれ百そちにもなりし

述懐

権少僧都定宗

なほさりによしや身はすてつる世をもそむきてそ出家をかくと
おもしろくもと

権中納言公雄

すてし世のうきやかなふともあらさらむ身はなほ我か
出家のちにはこころやかけし世との
うきてくいまは後の世をたのみきこよや
て待これは

入道前太政大臣

いける身のためとそおもひしなからへむ人のなからむ世まてわすれけり

返し　　　　よみ人しらす

いきる身のためはちとせを重ねても後の世わすれとなるそかなしき

題しらす　　兼好法師

いかにしてなくさむものそうき世をもそむかてすくす人にとはゝや

寂蓮法師世をのかれぬときゝて申つかはしける

後徳大寺左大臣

世中をそむきぬときくつきまとは道ゝ遠しといふ心あらなむ

返し　　寂蓮法師

人をはみちもとめぬれの身なせはよをそむきぬといふつまもなし

正嘉にはしりて草庵にとゝまらむとし

めされてのち寂因上人に申つかはしける

常盤井入道前太政大臣

う遁らそ深くみね山のおくもしらぬよそき時のやすらむとそ

前参議實俊出家して侍けるにつかはしける

入道前太政大臣

おなしよとおもふのこそむくとりはなれそ遁き

返し　　前参議實俊

おなしおなしみちにといそきそめのころもとともにきそめ遁

述懐の歌中に　　後一条入道前関白左大臣

いかにせんつきぬこゝろの数そへてよにすむかひもなきみよりすい

弘安百首哥たてまつりけるとき

静仁法親王

花の色は吉野の山のみを分てうき世を出るみちしるへせり

思しらす

平宗宣朝臣

なからへてありてもうき理をおもふよりそうき世にはけにまし

順助法親王

いつはりとおもひしりてのやかてかなふとちら世に哀をみる

右兵衛督基氏

はかなやも花の根まりに哀にうきをいとふらんあはれ

二品法親王覚助

はるゝよのゆくかたもなき月はあときまよひてはなき

藤原冬隆朝臣

うき身にはおもふまゝなる行末をかねてなけくそいつまてのまん

権少僧都澄寂

七十の後よりのちのいかならんなかきねふりの夢そさめさき

前大僧正仁澄

ものおもひはおもふそかなしむへきいましはしそうき世なれとも

藤原盛徳

いかにせんつのはるをなくさめん哀てふ身のとみおもふせは

前大僧正守誉

世中ハかりそめの草枕むすふともなく夢とこそ見れ

式乾門院御匣

夢とのミ思ひ捨てや厭ふらん憂き世をすてぬ人のむすひし
あはれ百とせの夢てまつりし時夢

太政大臣

ねかふらハ夢ともゆめと思ふ心ハ去すいつまてかくぬらん

題しらす　よミ人しらす

おもひそめ夢にみつれハ夢とてもうつゝなりけり

世をうしとおもふもつゝ身そとおもひしらて夢見る稽

中務卿具平親王

世中ハいつか夢とはおもふらんとろつなきこゝろまとひ

おつら那

續千載和歌集巻第十九

哀傷歌

題しらす　　　後京極摂政前太政大臣

ことはりをしりて世の人のなけかんに空にたなひく雲も霧も
百しきのなかめされしつゆに

法皇御製

人の世はなしひとすきしとおもひのはゆきかふ雲は定なきかな

題不知　　　覚仁法親王

あはれ世にあるやおちこちのあはれはかりとみえて見え世の

後鳥羽院かくれさせ給ひけるとしの御月忌

よしめ賀茂祭の日身まかり侍りけるに通忠の母のもとにつかはしける

陰明門院大貳

思ひきやあまた人よりそなれて身まかりしも涙の海のなみとなれ

返し　　　右近大将通忠母

くみそ君か涙そふらんけるおもひはよそなれしとなるよ

右大臣〈干時権大納言〉りうへ権大納言冬基か母の根とそとりけるうつりにとて月あかりてのちこへさせてはさみのとし五月五日ねまそへつかはしける

円光院入道前関白太政大臣

ふしき老の命なかられはよに待されはとそへて歌くんと
右大臣
思ひすてよこそかなしきをとてつゆもふりぬるとも心にまかせ
契しらす
大納言師氏
ぬれかみの露に命をとめて重ねは花の色はうつさてそかへり
新院御製
朝日の花はまたきにそへて見はなれねとそしひしものを
永福門院内侍
何とみしひとをたのむる末の露のよに忘てかくなかきいのち業
亀山院乃御子をとふらひて

前僧正道性
三つの時にあまれぬ世にせの夏も秋乃西け
慈道法親王
秋雨のふれぬ歌をふりしまさるかたき月のあはれさへ
伏見院くれ給ふを頼みける時亀山院乃御
子をとふらひそへるみ給ける
昭慶門院一条
うき物の中にあまた小昔とも思はれぬ世の我禁
前大納言為氏身はかりてのち十三年に
おこりける時補任乃添ける物をとるとて

太政大臣

忘れずよ忘れしは露の草枕あだにむすびし夢の別は

返し　前大納言為世

夢よりもふかき枕の草枕さえかし露の命むすびそめしき

月明かりける人のもとをおとづれて人のもとへつかはすとて

よみ人しらず

さえまさる露の光に波とさえくめる袖

亀山院くらゐさせ給ひてのち昭訓門院御

ぐしおろし給ける時入道前太政大臣もとに

つかはされける　伏見院御製

世をふかき袖の色にも露こそは多くやつゆにかゝるなるらむ

伏見院くらゐさせ給ひける時人のもとへつかは

しける　式部卿久明親王

忘れなむ忘れじとけさもかはらぬやまれ行く人の秋の夜すさ

前中納言定家身あかりてのち前大納

言為家嵯峨の家にこもり給ひけるにつかは

されける　後鳥羽院下野

君もやみぬいまひとの嫁よりもさみしきも宿はいかにと

返し　前大納言為家

都人なにのきみかへしまゐらせさの秋の山さと

ありしころ法印覚寛といひける人ありてま

てこそしのひまゐれ故の所にみてしけきゆゑ

とりて給けるは

あはれしといひやりけれはしのひなるら紀月比の秋の夜は

後見院へれしさせ給ふけり故のうへには

み給けり

新宰相

しまゐらへ御袖をそゝかれし波ひまなきころの秋よ

安嘉門院へれしさせ給よけり時なる月の

こゝろいくしきまのふりたれし

前権僧正教範

さくらし波のわかれゆきしかれおもひとは秋深かけ

前大納言為氏月ゆかりてなりつきの法

ひとめかりにかゝり給ふも津守国助

なをつまそ給けるをかゝに

法印定為

いかゝりしつらとしつめてかゝ秋にへきその長月の

京極院にと給て寛平九月九日出にそ紀

俗ゆり法師月乃おひさしみく法堂ゆへ

しろとにさしをらせけり

前大納言為氏

なき親のはくゝみ身にそふとてや枕をわかちしよはのおもかけ

母身まかりてのちよみける

賀茂遠久

身まかりてしはしもしつむ涙さへさそなきかけの袖の道

入道一品親王深性かくれ侍りける秋のころ

おほ僧正禅助に申つかはしける

法印行深

わかれこしひとすちを姉も重ねとや露は涙の色をそふらん

平貞時朝臣身まかりてのち世をのかれぬと

聞て

平宗宣朝臣

末のよまてなれし別をしひてや妹か袂の露のなかれん

藤壺院中将身まかりてのち人の許に

みえてあらはれもましはなきさのとも見ゆらん

ちねそのなれ候とやのこらんとよみ侍ける

云ひんを弁内侍へしにつかめてまゐらせ

侍けるに

山本入道前太政大臣

おもひきや世にありとてもいふかひなけれはなき

大進中納言定長身まかりにけるころ

いつゝまてさて前大納言長雅もとへ申つかはし

しけり

前参議雅有

人の世と我身ひとつのなかさはおもふしのやもちぬくり

朱雀院くれはを猶してのちに

源信明朝臣

あきの月日ふるへていまよりは我身ひとつのよはのかき か

人よみたくもてくよみ侍けり

よみ人しらす

なきれぬそ頼て母ふかくはかけし独や庭に君まつらん

俊恵法師母身まかり侍けり時やつれし

けり

太宰大弐重家

ふかんやいふかへて世にたしぬ别といひはなすとを

返し

俊恵法師

いはやまさらぬ别をかへすはおやならぬ身とそ そをふ

なれ人と身よりかへて

前大僧正道性

西けとしよのこすにひねの身らえのこころかりけれ

思しらす

前大納言良教

ちかへやされは身をとおもひそなかれてすかはぬへ

前大僧正源恵

身の世とみなそかなくうつみてをとうたさらしあかし つまへ

智道上人身まかりけるよしきゝて

従三位氏久

おくれゐは後のことさへ世にありてとふらむ程やつかのまならん

平貞綱母身まかりてのちふけりとよみ侍る

平貞房

うつゝとも夢ともわかぬ面影の身にそひなからまたれぬるかな

後近衛関白前右大臣身まかりて後人のもとへつかはしける

源兼顕朝臣

忘られぬ名残もたえしのちはなほありしのみそしのはるゝかな

題しらす

慈寛法師

おくれぬそはかなきめ風まへのきえのこりあるゆくへなるへき

うせにける人をゆめにみて

大江宗秀

はかなしやそれも夢の身にそひていつかさめぬる夢におくれぬ

題しらす

権僧正憲淳

風さわく浦つたひゆくむかしへとさらに返らぬ人そ恋しき

母の身まかりける時法文をとへて侍るに

津守国冬

しるへとそおもひそへける

うしはいこの身ひとつそね我はまくこともあるへき物かは

無常の歌とて

権僧正覚円

ききそふる世のはかなさにおとろきてはかなくやまて身をと思ふ
なれ人をとはりひそ

権大僧都忠性

おもひくふわかれし道ふとおもひ出るんそいまもかなしき

平時常身まかりてのちつまかさに
けつ文のうへに跡をとゝめて人のかとより
をくりたれは　平氏村

今はよもこけの下にそはてぬれとあはれはまさる草の影

従一位貞子身まかりにける骨をとりて高野山
へをくり侍とてみちにてよみ侍ける

法印憲基

行はさきみちもおほえぬ泪の山路を別のそてとなくなく

後二条院崩后のわさに人々十首歌よみ
侍けるに

法印覚守

みゆきとはいさて過にしこの山のふかくは今はそとおもひきや

題しらす

式乾門院御匣

あへ山の煙世をふることの身の雲やなほさらに数そふ煙なるらん

三条入道内大臣女身まかりにけるに

式部卿久明親王

立のほる煙もありしそらはさそ涙の雨そそひてふるらき

近衛関白身まかりにけるとききて

高階宗成朝臣

身にそへてともなふひのおもひせは我そこよひの煙ならまし

藤原経継か妻身まかりてのち萌葉に六字名号をかみにかきてとふ
らへとかんえ侍けるとて人にをくれ
よみつかはしける中に

あはれなと御の命をかはりのことわりならひかなしかるらん

蓮生法師

弟子にをくれてなけき侍る比無常の
心を

ことわりとおもふ人をはなきもせてなきを母におもひてそさき

前大僧正道昭

平貞時朝臣身まかりける時人のとふら
ひ侍けるに

藤原重綱

なきあとのつまともなしと思ひをもさまて涙そふ墨染の袖

そのゝちて侍ける人のむすめ身まかりて侍
けるふいろとゆかりなかりし出家をとけてとめ

これをたりしはまかへてはまかせて給けるに
今のりしより衣をそりて給はせるに

よみ人不知

いと涙の衣にふかきかぬきてひさつすみ染の袖

観覚法師身まかりてのち服ぬき侍とて
てよめる

藤原基任

あちこちはるけき立はなれ衣まてぬきさらむまてそ見る

母の身まかりける時ありひかりの服とき侍る
さりけれは

左大臣

こし我さらにぬきとめ衣まそあはれへそいとゝ露けき

後京極院かくれてその日よみ給ける

常盤井入道前太政大臣

ぬきさふの袖のまくれの花衣身にふる露はさてもたえ
贈従三位為子身まかりて五七日に給
ま経をそへりけるにみまかりける給ける

行淵法師妹

みそのおまりまかふ法の花に花ある涙の露のこほれ
せし

昭訓門院春日

わきそうとる法の光やまよふゆくみちにも闇の夜
為道朝臣十三年の仏事にいとなみて給

けつゐしくに懐舊の心を

藤原宗秀

あはれ身のよとふかなみのみたはやまとさそ

平時村朝臣身まかりてのち十三年の
仏事なといとなみ侍るときおもひつゝけ侍
ける

平時仲

いきて世にあはぬ人をもとふにこそ袖はぬれけれ

亀山院十三年の仏事にみちの母の十三
年同し月にあたりあへる人のもとへや
つかはしける

前僧正道昭

ゆくへやはかりまかる十とせあまり西に三とせ秋の露と

藤原雅朝身まかりてのち叙位に加階
し侍けるよしきゝてその人の中にて侍を
まうし

前参議雅有

なき跡にあはれとおもふ心のうちなる山ありてこそ
世となりにけれ

續千載和歌集巻第二十

賀歌

寛治百首歌めしけるついてに寄日祝

後醍醐院御製

久かたのあまてる神の陰よりも出る朝日そくもりなき

嘉元百首歌奉りける時祝

一条内大臣

民やすく国ゆたかなる御代なれは君を千とせと誰か祝はぬ

建保六年八月中殿にて池月久明といふ題を講せられけるついてに

順徳院御製

池のおもみさひゐぬまつのつもる月を千とせのかけやとる

祝の心を

土御門院御製

契りてもたえぬ君かよはひにまつはやちよの数そへてまし

竹とよませ給ひける

後二条院御製

なかきよのいやとよ万代をゆつるらんことの九重の庭のくれ竹

円融院御時紫野にて子日給けるに

法成寺入道摂政太政大臣

きみをなくて千とせとまちしける老木の松にかけやとらん

永暦二年内裏後番歌合に子日

前中納言匡房

きのふまて子日にまつのきさらくやと万代の松をこそまて

題しらす

大蔵卿有家

子日するこまつかはらのあさみとり霞まよ千世のきそこもる

子日祝といふことをよませ給ひける

法皇御製

松かえて結ひつゝひかん行末の千とせの春をけふの子日に

文保元年正月雪ふりける日御方たまよ西園寺へ御幸ありてつきの日正月おなしく御幸侍けるに又雪のふりけれはこそとて

ありしめしそ給はせたまひて

入道前太政大臣

きのふこそ思ひをいまは雪のふるにけふものちの千世の雪

御返し

入道前太政大臣

ためしある千とせの雪をかさねてそふりぬるけふのみゆきに

行幸を

伏見院御製

玉しきの庭の今日より行て千世もかはらぬ春の鶯の声

乾元二年二月内裏にて行幸年友をといふことを人々つかうまつりける時

万秋の流

常盤木のちよにもこもりしみどりの行末万代のいろ

大内乃花のさかりにかくよみ侍ける

前大納言公経

新勅撰集の中

行末としらぬゆきさにゆへても千世をかさねん松の操に

建久元年五十首歌奉りける時

前中納言定家

千世までもおかや人の花とや雲ゐの桜匂ひそめけん

永仁二年内裏にて三首歌講せられけるに

花盛久しといふ事を　左大臣

のとかなる御代乃春こそ色そふや雲ゐの桜匂ひそめけむ

円光院入道前関白弘安八年四月[illegible]に太

政大臣になりて侍りける時藤花によせて侍り

ける

伏見院御製

とき色そて花にむかし藤家この家ちの花へゆく今日ともかな

御返し

後光院入道前関白太政大臣

あちこちのためしとや藤家ともまつ時はなそてそるなん

正慶二年関白になりて五月五日よ

たまのふそへて奏し侍ける

後[illegible]関白前右大臣

そのかみのあやめをいまよりそ君か千世をかけてつゝん

御返し　　伏見院御製

あやめ草ひきてもつゆふかきおもひはなからん千世やへん

禁中のこゝろを

後京極摂政前太政大臣

萩の戸の萩の下なるみはしこそ千世の秋のかけそまつ

ものことも暮ゆくまゝりてまもるさに志

ろうろのこゝむしをきゝてはいよ〳〵松虫

松虫の声と小野宮太政大臣よみて侍りけ

つりて侍りけれは

圓融院御製

とやまなりねなりつゝ松虫のひとよふたよとなきて鳴らん

寛治百首をすゝめてよみける時秋田

前大納言基良

風さむきあしたの草葉をとめつる君か千世のためしまつ秋

文治六年女御入内屏風に山中に菊盛なる

所に仙人あるところ

前中納言定家

限なきやまちのきくのした露はむすひしやちよを契るなるへし

鳥羽殿の前栽合によみてくと

藤原顕綱朝臣

君か代はきくの下ゆく岩ゐの水たえすそ千世をまつ

弘安七年九月九日三首講せられしに

菊花萬久といふことを

亀山院御製

千世まてもうつろはぬ籬はめくりきてかはらぬよの菊乃林

位よさりましましける時にしもなくもてまつ

らせ給ふまゝしきつ

法皇御製

こゝろさへひさしき世より経あそて老ぬる後にても白菊のはな

清性寺入道前関白内大臣に侍ける時家歌

合に

藤原雅仲朝臣

万代乃秋をかさねにならふなのは君かよはひとのこる白菊

崇徳院位におはしましける時雪庭樹花

といふことを講せられけるに

皇太后宮大夫俊成

ふりしきやこゝろさしも松にも雪はのこりの花もそ咲

寄神祇祝といふことを

前大納言為家

千年山松ふく風のちよのかれは君さこゆく万代乃声

題しらす

清性寺入道前関白太政大臣

我君のよゝのたか山しるきかれはおふる人はかはしそ空ふ

今上位につかせ給ひける日あめふり給ひて
は時にのそみくそらはれにけれは
さひてよめる　女蔵人万代
あきらけき君かみよそしらるゝ位山まさるへかりける紫
正和三年二月吉日祐よ時尊給ひける時従
位上に叙せられけるによめる
中臣祐親
雲ふかき君かみゆきに位山まさりけるのちのみちかもれ推しふ
春元百年のあそてらしらし時山
前大僧正良覚

雲ふかき君かよしみのうちにいまも昔給はしにこ
聞しらす　従三位為信
君か世の千とせをうけてかれはぬふるにおほえぬ鶴の白糸
小弁
君か代といはふこゝろのあきのいそねの松はよろつよまて
性助法親王家の五十首うたに祝
入道前太政大臣
いまも猶さかゆる君のたかやまはるの松かえおなしみかけとそおもふ
百とせの齢めされしつくしに
法皇御製

あつめおくことのはやちりもせく中せゝにしられなほまさる
寿禄のけとかへてこのたひとてさかえ給ふ光よ
寛治百首歌奉りける時寄日祝と
前大納言基良
くもりなきみよの光にくもてそ君の御日ものとかなれ
百首歌たてまつりし時
前右大臣
くもりなき月日のかけを君か世のひかりにそへて照さかえん
前元百首歌たてまつりしに
前中納言為方

月も日も光をそへてあきらけき君か御世をそてらさらん
題しらす　平貞時朝臣
あさみとり光そしるき万代のためしとなりて秋の月
為君祈世といふことを
前参議雅有
今もなほくもりなき世をいのるかな君か為なる五つの
文永三年三月続古今集竟宴和歌
前大納言為氏
和歌の浦によみをく玉をひろひてそいにしへ人の数にみかは
後法性寺入道前関白右大臣に侍けるとき

家に百首歌よみ侍りけるに　太宰大弐重家

世をぬとも身をかへしそすまむ昔ならふれしるしきこえの

文治六年女御入内屏風に江澤あるに蘆しけれる鷺立　前中納言定家

行末もいくよの志もかおきそへんあしまにすめる鶴の毛衣

百首歌めし侍りしついてに　法皇御製

契りをきむまゝの万代のともなれや竹園の松はゆくの春の数

寿永百首奉りし時祝　前中納言為相

君かへむみちのまくらにひさしき千年万代かさゝむし

村上御時天慶九年大嘗会悠紀方巳日参入音声鏡山をよめる　よみ人不知

我君の千世のためしをとりてみむ山とよのあかりにれんかたのさ

堀河院御時寛治元年大嘗会悠紀方風俗の歌千松原　前中納言匡房

とれはなるちとせの松原色ふかくてさゝけのものをりしきかな